LIGHT HOUSE
ライトハウス
〒152-0035 東京都目黒区自由が丘 1-16-13
TEL 03-3717-2711　FAX 03-3717-2721
http://www.lighthouse-jiyugaoka.jp　e-mail gospel@lighthouse-jiyugaoka.jp
郵便振替口座　00120-6-170857　みずほ銀行 渋谷支店 普通 2382850（ライトハウス）

CFI ニュースレター C2023-04 「預言の十字架」

[今月の聖書]
「彼は、主の前に若木のように、乾いた地から出る根のように育った。彼には我々の見るべき姿がなく、威厳もなく、我々の慕うべき美しさもない。」(イザヤ 53: 2)
「彼は、自ら懲らしめを受けて、我々に平安を与え、その打たれた傷によって、われわれは癒されたのだ。われわれは、皆、羊のように迷って、各々、自分の道に向かっていった。」(イザヤ 53: 5.6)
「あなた方の中に苦しんでいるものがあるか。その人は祈るが良い。喜んでいるものがあるか。その人は賛美するが良い。あなた方の中に病んでいるものがあるか。その人は教会の長老たちを招き、主の御名によって、オリーブ油を注いで祈ってもらうが良い。信仰による祈りは、病んでいる人を救い、そして、主はその人を立ち上がらせてくださる。かつその人が罪を犯していたなら、それもゆるされる。」(ヤコブ 5: 13 -15)
「そこでピラトはイエスを捕らえ鞭で打たせた。兵卒たちは、いばらで冠を編んで、イエスの頭に被らせ、紫の上着を着せ、それからその前に進み出て、ユダヤ人の王万歳と言った。そして平手でイエスを打ち続けた。」(ヨハネ 19: 1 -3)
「しかし、私はあなたの信仰がなくならないように、あなたのために祈った。それで、あなたが立ち直ったときには、兄弟たちを力付けてやりなさい」。(ルカ 22: 32)

お元気でお過ごしでしょうか？今月は「預言の十字架」と題して、イエス・キリストの十字架の意味を、今日的に学びたいと思います。今年は旧約聖書イザヤ書を学んでおりますが、その中で最もよく知られている章は 53 章でしょう。そこには苦難のメシヤの物語が描かれています。
イザヤ書には、一人のみどりごが生まれると預言され、その方が世界を、平和をもって支配する王となると書かれています。しかし、その素晴らしい王は、苦難のしもべとして、深く傷つけられ、人々から見捨てられ、ついに死に至るのですが、このお方によって、私たちの罪が赦され、救われると預言されています。
預言者イザヤは直接見たように、そのお方のすぐそばに立っているかのように表現しています。しかし BC 7 世紀の預言ですが、それに合致する人物は今日に至るまで、イエス・キリストの外いません。イザヤが預言していた人物は、ナザレ人イエスであり、ゴルゴタの丘の上に十字架に釘付けられたお方だったのです。
私は「彼は、自ら懲らしめを受けて、我々に平安を与え、その打たれた傷によって、われわれは癒されたのだ。」(53: 5) という記述に深く教えられました。この「癒し」は少なくても三重の意味を持っています。

① 断絶した神と人との関係を癒し、和解の道を開いてくださった。
② 人と人との関係における争いを鎮め、平和をもたらしてくださった。
③ 病によって滅びつつある肉体に、癒しを与えてくださった。

イエス・キリストを救い主として信じるという事は、少なくても三重の意味における癒しを信じていることなのです。
現実問題として、ウクライナとロシアの戦争が神の御手によって癒されるだろうか。今、病の宣告を受けている兄弟姉妹が、イエス・キリストの名によって癒されるだろうか。そして真の信仰を失ってしまった日本民族が、神に愛され、神と共に歩む民族として、和解の道を歩むことができるだろうか。
この預言の言葉が、あなたの人生に具体的に癒しをもたらす言葉となりますようにお祈りいたします。

小田 彰

(お知らせ)
同封のチラシのように「喜びの歌を共に」が 5 月 5 日淀橋教会において開かれます。ぜひご参加くださいますようご案内いたします。喜びに満ち溢れた賛美にご参加くださる時、きっと新しい力が湧き上がってくると信じ祈ります。

「喜びの歌を共に」のためにお祈りください。

このたびLet’s Sing 新Seika 「喜びの歌を共に」を5月5日淀橋教会ウェスレーチャペルにて開催する運びになりました。私は昨年から、アフターコロナの教会活性化について祈って参りました。この三年の間に、日本の教会の出席者は半分位になったと思います。また、献金の額もさらに少なくなっていると思われます。地方に行けば行くほどその現場は厳しいようです。

第二次世界大戦が終わり、多くの教会指導者たちが拘置所から解放され、再び伝道活動を始めようとした時、日本の教会は大変弱体化しておりました。しかし、米国を中心とする海外からの膨大な支援と、多くの宣教師たちによって、戦後の教会再建が進められたのです。

戦後、日本の教会成長の三本柱は、ミッションスクールの発展、クリスチャン社会福祉事業の成長、大衆伝道や文書伝道の前進等を上げることができます。もちろん、教会の幼稚園教育の普及は、その土台を作ったと言っても過言ではないでしょう。

今、コロナが終息しようとする時、日本の教会を復興するエネルギーはどこにあるのでしょうか？海外の資金に頼ることができません。かつてビリーグラハムが日本で開いたような大伝道集会は今日できないでしょう。そしてかつて熱心であった信徒たちは高齢化を迎えています。若い人たちは充分成長していません。また世代間ギャップも大きくなっています。

そこで今救いの恵みに預かっている私たちが、恵まれ、喜びに満たされ、福音の前進のために捧げていくことから始めなければなりません。

三年にわたるコロナ禍における制約は、集まるな、声を出すな、食事をするなでした。これは初代教会以来、教会の集会が大事にしてきたことの本質が否定されたことです。今様々な制約が解消され、集まることも、声を出すことも徐々に許されるようになりました。しかし、今日教会の集会はかつての勢いを失っているのではないでしょうか。

1月20日未明、共に主を賛美する大いなるうねりが与えられるかもしれないという幻を見ました。その日からニヶ月の間、どうしたら兄弟姉妹が集まり、賛美し、祈り、心を一つにしていくような集いができるかと思いめぐらして参りました。

それは教派、教会を越えて、兄弟姉妹がひとつの聖歌集を歌っている姿です。かつて中田羽後師は、聖歌聖会を開くように勧めました。それは次々と聖歌を歌いつつ、歌詞を味わい、必要に応じて聖書を開き、賛美を続けていくことでした。聖霊の働きが濃厚な時は、そのまま祈りの場となり、悔い改めの場となります。また、場合によっては自らの証をしたいと立ち上がるものもあります。これといって説教者を立てるわけではなく、聖歌それ自体が語るメッセージを分かち合っていくのです。

そのことを思い出して、聖歌を心行くまで歌う集いを開いてはどうだろうかと示されたわけです。それがLet’s sing 新Seika！「喜びの歌を共に」です。

日本中が賛美の声で満たされる山火事を期待するなら、今始めようとしている事は焚き火のようなものです。しかし、集まっては歌う人々の群れが各地に広がっていくならば、教会が変わるだけではなく、社会全体に大きな光が与えられるでしょう。

この私の願いと幻のためにお祈りしていただきたいのです。　　小田　彰

「そして、彼らが歌を歌い、賛美し始めた時、主は伏兵を設け彼らに向かわせられたので、彼らは打ち破られた」　(歴代誌下20：22)